



怒れる杖——皆吉爽雨の晩年 赤松蕙子

享年八十一歳の皆吉爽雨の俳歴は、大正九年、十八歳の頃にさかのぼる。処女句集『雪解』はその最初の二十年間の作品で、虚子選以外のものは一句も容れず、師の高関にまかせきった五百一句であった。

さら／＼と又落衣や土用干 (大9)

ころびたる児に遠ころげ夏蜜柑 (大11)

がうがうと深雪の底の機屋かな (昭3)

春雨の雲より鹿や三笠山 (昭7)

六十三年にも及ぶ句歴の、実に三分の一に当たる徒弟時代である。すでに関西の「山茶花」では三選者の一人であったが、直々の指導者である大橋桜坡子をして、

「隼のごとく現れてくれた爽雨君」と言わしめている。それに対して虚子の序文は、爽雨の研鑽と礼節とに報いる懇ろなものであるにもかかわらず、筆先に少し勘気が走っていた。

「年少にして既に老成した態度を具へてをつた」「景色を叙するにも人事を叙するにも気の利いた才走つた着眼点のあ

ることに気がつく」「その餘弊として奇矯に走り小細工に陥るといふことも亦ないとはいへないのである。」
例えば虚子は、同じ新進擡頭の茅舎や朱鳥に対しては、その序にかえて、

「花鳥諷詠真骨頂漢」(川端茅舎)

「曩に茅舎を失ひ今は朱鳥を得た」(野見山朱鳥)

といった意識的な名文句を与えるが、最も忠実で従順な、虚子の客観写生・花鳥諷詠の追求者には、自省をも含めて牽制をしてしまふのである。

けれどもその虚子の巨視的選眼によらなければ、処女作が名作として後世に残ることはなかったかもしれない。爽雨はこの時三十八歳。

序文については書いてもらえるかどうか、少なからず心配したと言っている。頂けただけで頭をたれ、この師のもとに力を尽くす覚悟を新たにしたら、と晩年述懐している。

ささやかなことのようにだが、この新たにした覚悟は、爾来一生涯にわたり句作の念々刻々に実証されて、虚子を圧し、

後進を導く。それは虚子ならずとも畏怖を覚えるほどの、灼灼とした作句生命力であった。

爽雨は虚子の指摘した、「気の利いた才」を一本の反骨として俳句開眼をした。これしか自分には無いのか、という失意がかえって自尊の発火点になる。このことが晩年にどのように影響してゆくかを糾してゆくのは興味のあることではなからうか。自分を中心に置く主観俳句をきびしく否定し、冷徹な客観の眼を鍛えぬいた、その晩年へ一足飛びにとんで比較してみたい。

年惜しむ傘寿来よとか寄せじとか (昭55)

爽雨句集は『雪解』以後『聲遠』まで十一冊を数えるが、角川源義氏による推賞で第一回蛇笏賞を得るのは、八番目の句集『三露』である。爽雨六十五歳。虚子逝いて八年目であった。若い頃から客観写生を至上としてきたが、「主観写生という至難のわざあり」と、ひそかに洩らしたことがある。客観と主観、この表裏一体の観点を見極めて、自在に句境をひろげてゆくのは、ようやく年齢意識を詠みはじめる喜寿の頃である。

歩みつつまだわが喜寿の中の年 (昭55)

門火して西方入日にと散歩 (昭55)

生家無き裏川帰省子にながれ (昭56)

主情がもろに出る用語は用心して使う習慣が身についているので、「年惜しむ」の季題に自分の年を重ねて詠むのは、

先の傘寿の掲句が初めてである。喜寿の句にはまだ多少の照れがある。西方入日へあゆむのも、散歩ということでないし、おり、生家無き故郷にも帰省子を登場させるなど、極力自分の情念をおさえて平静であろうとする。これは私物であるいのちと、大自然のいのちとを混同させまいとする努力の現われである。

「年惜しむ」は行く年来る年の除夜の只中の感懷で広義のもの。「傘寿」はまさに己れ個人のものとして起る。然るのちに傘寿そのものを客体として扱う。「来よとか」「寄せじとか」の問いかけの形、気合いかかった反復仕立てなどは、齢にまつる余分のものを削ぎ落とす潔さがある。「傘寿」を笠に着て、皆からいたわられる案山子ではないのである。

案山子立つうからの皆のもの着つつ (昭55)

案山子等にまことの翁なども居よ (〃〃)

たまたまこんな句があるからではないが、爽雨はその傘下を慈しみ育てながらも、常々、「どうしてみんなこんな写真生が下手なのだ」と嘆いた。自分よりはるかに逞しい年齢層を顧みて、この歎きは年々昂じてくるようであった。

伊豆にして雪後のうしほ難流す (昭56)

幹打ちてひびきし花もなく万葉 (〃〃)

正面をゆづらず壺の牡丹二花 (〃〃)

白樺の幹万緑を総ささへ (昭57)

郭公鳴くなべに雪痕はねて嶺 (〃〃)

爽雨自身の俳句は年齢と反比例していた。一句の中、どん

なスチールの対象物も鮮明に、立体的に容れることができ、それに若い時から鍛えられた独自のリズムが調和して、非情な美しさを現成している。右に掲げた五句のいずれからも、読者は各々の眼に、清冽な景を奥深くまで焼きつけることができるであろう。

だが最終句集となった『聲遠』ののちに、一大事件が身に降りかかった。『聲遠』は昭和五十六年秋までで締めであるから、残りは二年足らずである。俳句量のピークは歿年の一年前で、主宰誌「雪解」に毎月「日夕集」と題して年間一六二句を発表。翌年は八月号まで「山市集」として八六句を発表。その他雑誌にいくばくかあるうが、遺句集を編むには少な過ぎる。この「山市集」の時期に、自宅の火災に遭遇するという思いがけない変動が起こる。

心身共に受けたショックは大きい。が、皮肉にも写生の達人には好材料となつて健吟がつづくのである。そして肉体的な衰弱の中にたどりつく句境の極致は、余人の推測を許さぬ領域にあそぶようであった。今、遺作を静かに観てゆくことができるのは有難いことといわねばならない。では災難以前の作から抄出する。

竹秋や選句の果はいつも夕
初扇とぎして女消ゆるごと (昭56)
秋拾着てたつ裾に行く手あり (〃)
老の日の郊行いつも雲を眼に (〃)
老境に順応している作を物色したわけではない。自然にひ

かれる句だった。老師にふさわしい句柄を求めるのが人情であらうから。

鯛焼をもたらす重きものの如 (昭57)
鯛焼を食うひろき尾の笑へるを (〃)
旅立の清和ドルもて饑別に (〃)
老妻と床上げ前後梅雨明くる (〃)
餅一つ食べて餉支度大晦日 (〃)

平穩無事な日常不断吟の中に俳諧味がにじむ。爽雨はこの時期によく自註をほどこした。なくもがなの感があつたが、初心者への思いやりであらう。

壺にのこす葉のみの牡丹更衣 (昭57)
散歩道曲るかならず風の秋 (〃)
脚をつと折りし罍の蜘蛛秋の暮 (〃)
咲きそむる山茶花と地の一片と (〃)
萩枯るる枝の一縷も損はず (〃)
静かな呼吸。嵐の前の不安は勿論見えない。
爽雨一流の一生息災なる句作生命は、その底に劇的な運命をひそめていたというべきか。

生まれたばかりの瑞児の時から乳母の懷に抱かれて貰われてゆき、改名して皆吉太郎となった(父は丸岡藩士。のち丸岡町長で俳諧をたしなむ)。そうした生いたちに裏打ちされた八十一年は、終り方も飛躍的で、言ってみれば火の中から舞い上がった不死鳥のようであった。ここに至つて發揮される本領は、しかしながら燃える炎ではなく、せせらぐ水の

調べである。

来診に問はるる目まひ宵の春 (昭58)
惜しむただ灰燼蔵書西行忌 (〃)
初音しぬ藪しづもりも大き時 (〃)
木々の芽や転居は書より立てならべ (〃)
春の炬に焼亡一書うかび出づ (〃)
鳥雲に転居表札なほ紙片 (〃)
牡丹挿す災後やうやく壺一つ (〃)
先住のままわが書屋初つばめ (〃)
測々とした悲しみはそのまま、生きてきた命のいとさとして詠み続けられ、いのち終つてもなお、とどまることのない流域に乗り出している風情である。

門は出ねど門までいくたび春惜しむ
白南風の竹の穂蝶をはなさざる
絶唱に近い。天辺に遊んでいる蝶は竹の穂ともつれあって、高いテレモロを奏でている。

爽雨自身に晩年という觀念は淡かったはずである。事象として眼前に聳え、「観照」をうながす相對であつた。いまわの際まで写生句が詠めるということがその証しである。ただ、そこまで至る日々の活力源は何かと問われたら、永遠に謎、というほかはない。同じ五感を持ちながら、昏い者には昏いのである。

唯一つ、晩年の作にしきりに出てくる「杖」が妙に氣になり抽出を試みた。若き日の反骨精神が、老骨を支える一本の

杖に集約されてはいまいかと、山をかけてみたのである。

杖とめて光陰花とわれのひま (昭53)
炎天の地軸に立てて杖はこぶ (昭54)
一もつれあれば杖あげ柳の芽 (昭55)
かつと噛む杖先秋の水の鯉 (昭56)
地にしづむ杖もてかがみ地虫出づ (昭57)
杖やりて澄む潦青き踏む (昭58)
二十余句を数える中から右の如く選ぶうちに、この杖から電流のように伝わってくるものがあつた。足下の地を打つ。宙を払う。鋭く前方を指す。横たえる。
さまざまな相を現わす杖が、爽雨の詩魂を放っているように見えた。とりわけ写生の真髓を、「見よ」とばかりにのべた一閃。

かつと噛む杖先秋の水の鯉 爽雨
には、神將の怒りを感じ、眼が眩む思いだった。写生を怠り、写生を軽んずるものに俳句を論じられてたまるか、と声なき一喝をくらったようであつた。
ところで杖といえば、ここに「みちのく」の九十翁の一句がある。

杖ついて疊を歩く西行忌 遠藤 梧逸
このほえましい放下の姿。これに比べて爽雨晩年の句境は、なお求道的示唆的であつたと、杖の句から断言できないであろうか。